

五月十五日。午前八時三十分、アッツ島通信部隊は一号無線機を破壊して、チチャゴフ地区に移動。独立無線第十一小隊の無線機の乾電池は、あと十日分しかなかった。

五月十七日。荒井峠の一ヶ小隊全滅、各地区隊はチチャゴフ地区を死守することに決した。

五月十八日。荒井峠の撤退により、敵の攻撃重点は、雀ヶ丘から虎山に向けられてきた。敵の砲爆撃は少しの衰えも見せなかつた。その切れのない轟音の瀑布のような連続に、耳がまるでバカになつて、すぐそばで応射している機関銃の音もまるで聞えなかつた。だが、何よりもまず、霧が重苦しかつた。

16

これより先、大本営は、潜水艦三によるキスカからの戦力（一隻五十人軍需品若干）補給、潜水艦一による内地から三百五十屯の糧秣弾薬輸送、海軍機による落下傘投下を計画していた。

これが、五月十六日、参謀総長が北方軍に対し、「西

部アリエーション列島ヲ確保シ、敵ノ企図ヲ粉碎スルタメアラユル方途ヲ講ジツツアリ」と云うその「方途」の実質なのであつたのだが、十九日、大本営は遂にその作戦方針を変更するに至つた。

霧の状況、気象予測の結果、作戦成功の成算なく、今後持久戦に移行するに於ては、全局の戦略上重大な破綻をきたす恐れがあると判断したのであつた。

17

五月二十一日。朝、雀ヶ丘の守備隊は全滅した。同夜、奇襲奪回を試みたが不成功に終つた、この日、前線は更に収縮した。主要火器は高射砲四門、山砲四門、速射砲二門、大隊砲一門、機関砲七門、重機二十五銃を残すのみであつた。兵員、二千百五十名。

二十二日。本名・林・後藤各中隊全滅。機関銃小隊全滅。小沢・佐久間各小隊全滅。

二十三日。十勝岳陣地全滅。この二日間に於ける敵の攻撃は一層熾烈であつた。敵の十五榴、十榴の各砲兵大隊は、完全にその威力を発揮した。敵は、砲煙と濃霧のいたるところに、充満している感じであつた。不眠の状

態が続くと、どうでもいいやと、なにかなげやりなものを感ずる。不思議に恐怖感はなかつた。死というものが、今まで隣にいた奴がゴロリと倒れる、そのまま動かなくなつてしまふ、そのことと結びつかない。動物がある瞬間から物体になつた。ただそれだけのことではないか。そして、また、その物体と自分とが結びつかない。たとい、結びついたとて、それがどうだというのか。そんなことより、ただ、この音が、何とかならないものか。それは、もう音としては聞こえないのだがしかしやはり何かあり、そいつのために、こつちは樽の中の芋のやうに、その何かの中でこねまわされ、かきまわされている感じなのであつた。

北方軍司令官からの電報があつた。

（貴部隊ハ孤軍ヨク長期ニ亘リ北太平洋方面ノ戦略要
点ヲ確保シ優勢ナル敵ヲ該方面ニ牽制シ以テ帝国北辺ノ
防備態勢ノ強化ニ資シタリ（中略）武勲ハ真ニ拔群、内
外ヒトシク確認スル所ニシテ、予深ク満足、切々トシテ
感激ニ堪エザルモノアリ。

軍ハ海軍ト協同シ万策ヲツクシテ人員ノ救出ニ務ムル
モ、地区隊長以下凡百ノ手段ヲ尽シテ敵兵員ノ尽滅ヲハ
カリ、最後ニ至ラバ、潔ク玉碎シ、帝国軍人ノ精華ヲ発
揮スルノ覚悟アラシクコトヲ

云わば、最後の引導であつた。

二十四日。山崎部隊長宛、天皇勅語を受信。

二十五日。この日、濃霧が消えた。めずらしい晴天。
太陽の光。

そして、思いなしか、敵の砲撃も少し間遠のようであつた。意外に爆撃も少ない。うるさく飛んで来るのは来たが。

じつとしていると、被服から水蒸気があがる。

馬の背方面に侵入して来た敵小部隊を撃退する。反撃はない。

——この日、駆逐艦二隻、北千島を出発。これにより、強行補給、又は秘密裡に近すぎ得れば撤退の計画であつた。

二十六日。昨日に引続いて、全線とも敵の行動は活潑でなかつた。陣前、約千米をへだてて、敵と対峙している。思いだしたように射つてくる。

午後三時、約二百の敵によつて、馬の背方面遂に突破される。

二十七日。虎山に敵の遺棄屍体三百。昨日獲得した敵

將校手帳には、小隊四十四名中、戦死二十名、とある。
だが、味方も残少なくなつた。火砲重火器の使えるものも殆んどない。糧秣また心細し。

二十八日。駆逐艦二は、アッツ至近海上に於て消息を絶つた。

北方軍指令部は、その戦闘指令所をようやく幌筵島柏原に推進し、第五艦隊及び第十二航空艦隊と協定、なおアッツ島部隊の撤退に努めようとしている。

18

三田の独立第三百三大隊の守備するチチャゴフ湾地区が、結局、最後の拠点となつたのである。

この島でも、三田はやはりいろいろのことを感じ、それを例の手帳に誌していたに違いない。戦闘が如何に激烈な瞬間でも、三田はきつと、何かを見ていたろう。

しかし、その手帳も、「機密漏洩上」五月十六日、敵に焼却を命ぜられた筈だ。それからあとの三田を私は思う。あの大きな眼の光りを思いだす。

へ死ねたら死んだ方がいいようです。

結局この地上は救われないものであり、
宇宙は流れゆく虚無そのものでありますからね。

三田の最後の手紙は五月六日付、ずいぶんあとになつてから、岩手県花巻の彼の両親のところにとどいた。「元気」ただ、その二字であつた。

19

五月二十九日。アッツ島北海守備第二地区隊より、海軍通信系によつての発電。

へ一、二十五日以来ノ敵陸海空軍ノ猛攻ヲ受ケ第一線兩大隊ハ殆ンド潰滅（全線ヲ通シ残存兵力約百五十）ノタメ、要点ノ大部分ヲ奪取セラレ、辛ウジテ本一日ヲ支ウルニ至レリ。

二、地区隊ハ海正面防備兵力ヲ撤シ、之ヲ以テ本二十九日攻撃ノ重点ヲ大沼谷地方面ヨリ、後藤平敵集團地点ニ向ケ、敵ニ最後ノ鉄鎚ヲ下シ之ヲ殲滅、皇軍ノ真価ヲ發揮セントス。

三、野戦病院收容中ノ傷病者ハ夫々最後ノ覚悟ヲキメ処置スルトコロアリ。

非戦闘員タル軍属ハ各自兵器ヲトリ、陸海員トモ一隊

ヲ編成、攻撃隊ノ後方ヲ前進セシム。

四、攻撃前進後、無線電信機ヲ破壊、暗号書ヲ焼却ス。

五、状況ノ細部ハ江本参謀、沼田陸軍大尉ヲシテ報告セシムルタメ残存セシム。

六、最後ノ拠点トシテ島原（サラナ湾ヨリ駒ヶ岳ニ至ル間）附近ニ拠ルモ一案ナルモ、最早補給ノ道ナク、且、狭隘ナル地域ナルヲ以テ、長期持久ハ望ミ得ザレバ之ヲ放棄ス。

此の電報に次いで、

〈機密書類焼却。之ニテ無線機破壊処分ス〉

一八四〇、受信。

〈五月二十九日決行スル当地区隊夜襲ノ効果ヲナルベク速カニ偵察セラレ度。〉

特ニ、後藤平、雀ヶ丘附近〉

二二一〇、受信。

〈従来ノ懇情深謝スルト共ニ、閣下ノ健勝ヲ祈念ス〉

20

二十九日、参謀総長、陸軍大臣よりの発電。

〈本二十九日、貴地区隊ノ奮戦状況更ニ上聞ニ達シ、再ビ優渥ナル御言葉ヲ賜フ。恐懼感激ニ堪エズ。今ヤ最後ノ関頭ニ立ち、毅然タル決意、堂々タル部署ノ報ニ接シ合掌シテ感謝ス。直チニ上奏スベシ。必ズヤ諸子ノ仇ヲ復シ屈敵ニ邁進セン。〉

願クハ意ヲ安ンゼラレ、永ク北辺ノ守トシテ神鎮リマサンコトヲ〉

21

この夜の攻撃は、夜十二時頃からはじめられたもようであつた。

拂曉、一団となつた守備隊は、敵の一線を突破し、後方陣地深くなだれこんだ。

紛戦、白兵。入りみだれる叫喚。自軍の兵力をうつおそれがあつて、敵は砲爆撃を実施することができない。

アツツ島至近にあつた我が潜水艦は、敵の平文発電を傍受した。

（一、一時五十三分、ユールドマウンテン（虎山？）或いは獅子山）ノサラナ・マツカッサル峠ハ日本軍ニ突破サレタ。

二、三時四十分、出撃ノ日本軍兵力ハ、約三百。

三、四時二十一分、第二大隊カラ派遣サレタ第二搜索中隊ハチャード後退ヲ余儀ナクサレタ

戦いはなお続いた。敵の情報によると、山崎大佐と出撃日本軍の大部（約百三十名）が戦死したのは三日頃である。

そして、十日に至つても、日本軍の抵抗は散発的ではあるが、まだやまなかつた。

かなり離れたキスカ島まで、その砲声が、かすかに聞え、夜になると、赤く火が見えたりしたのである。米軍の捕虜となつたものは二十九名。何れも負傷し意識を失つていたものばかりであつた。

22

キスカ撤収作戦は潜水艦によつて何度も実施されようとしたが、その度に損害は累加し、七月七日艦隊の全力を以てしても成功しなかつたが、二十九日、折からの霧

中を、遂に成功し、八月一日、全員北千島に帰つた。

23

五月三十日、大本営は、アツツ島部隊の玉砕を公表した。それによれば、敵兵力約二万ということであつた。

八月二十九日、アツツ島将兵の氏名が発表された。何れも二階級特進、ということであつた。三田は二階級進級して、陸軍兵長であつた。つまり、彼は、最後まで、最下級の兵士であつたのだ。

（終り）

（この作品は、一九五二年九月「小説朝日」に発表されたものである）